

## 生と死の調査その1 (2009年8~9月。インド, ラダック, ドムカル村)

出張者 (所属): 月原敏博 (福井大)

### ●日程

2009年8月21日~9月12日 : インド, 下ラダック, ドムカル村

### ●行程

8/21 福井発, 東京経由, デリー着。  
8/22 デリー発, レー着。  
(3日間, LEDeG 新旧 Directors 及び LIP との諸調整)  
8/26 レー発, ドムカルゴンマ着。(ゴンマ調査)  
8/29 1泊2日でコラムリク~スパンクル往復。(コラムリク調査)  
8/31 トンロス~バルマ往復。(トンロス, バルマ調査)  
9/1 ゴンマ調査(続き)  
9/2 ゴンマ発, バルマ着。(バルマ調査続き)  
9/3 バルマ発, ド着。(バルマ調査続き。翌日よりド調査)  
9/5 ド調査(続き) (ゴンマ往復。村長等との打ち合わせ含む。)  
9/6 ワル往復, ド発, レド着。(ワル調査。平田との調査研究打ち合わせ。)  
9/7 レド発, ド経由, レー着。(レドの旧家屋調査。平田との打ち合わせ。)  
(2日間, LEDeG 新旧 Directors 等との諸調整。)  
9/10 レー発, デリー着  
9/11 デリー発,  
9・12 東京経由, 福井帰着

### ●報告

現在存命中のドムカル村の全ての既婚婦人から出産経験と母子関係(親族関係・婚姻関係を含む)を聞き取る作業に着手した。各人ごとに、流産、死産、早産など含め、子供を何人生んだか、またそれぞれの子について、生死年(及び年齢)、性別、死んだ場合は年齢とその理由、成長して存命の場合は名前等のほか既婚か未婚か、嫁いだ場合は嫁ぎ先の村(と近隣村の場合は家名まで)、婿をとった場合は婿の実家の村(と家名)、さらに、それぞれの子について、生んだ場所(村の家でか、レーの病院でか、など)も聞き取った。

今回は総数 225 人分ほどのデータを収集できた。これはドムカル上村と中村においては対象となる婦人のほとんど(9割以上)、下村においても3割以上を占めるので、全村でも対象者の7割程度は調査できたことになる。調査完了以前でありデータ整理もまだの段階だが、おおよそ次のことははっきりしてきた。

① かつては乳幼児死亡率がかなり高く、また流産・早産・死産なども少なからずあった。これらをあわせた子供の死亡率は、年配(母親年齢60~70以上)の世代では5割ほどにも達する。が、それは世代が下るにしたがって急降下しており、現在ではおそらくかつての10分の1近くにも下がっているだろう。また、昔は10人前後子供を生むことは普通だったが、いま30歳前後の若い母親たちになると生むのは3人程度までに減り、また生む場所も村ではなくレーの病院が大部分となってきた。

② こうした変化は、インド政府による家族計画の推進や医療環境の整備などによって起こったと見られるが、ごく最近10~15年ほどの間に顕著に進行して定着してきたことにすぎない。

今回の調査で、母子関係と婚姻を軸に母系の社会関係(親戚)が詳細に辿れるようになったため、これまでに行った2種類の人口・社会調査、

1) 世帯票調査により世帯単位で構成員等を把握できていること、

2) パスプン調査で父系の親族集団・社会関係をある程度把握できていること、

とは別の、また一つ異なる角度からドムカル社会を理解することもできるようになった。



ドムカル上村は夏の終わりの収穫期。寒々としていた冬とは一変して、畑や庭先に座り込んでの、野外での聞き取りに時間を多く費やす調査となった。



高齢でも元気で仲睦まじいドムカル下村の老夫婦（ともに77歳）。この婦人は12人の子を生んだ。半数は10歳以下で失ったがそれでも6人を育て上げた。



ドムカル中村の老夫婦。中村や下村では杏が栽培されているが、杏の実を樹から落として集め、乾かす作業を穏やかに行う老年カップルの姿が散見された。



ドムカル上村の小学生たち。近年はレーの病院で生まれた子がその多くを占める。インドでは僻地の小集落でも低学年向け小学校は真っ先に配置されている。



20年ほど前から村のメディカルセンターは乳幼児の予防接種のカードを親に配っている。妊婦や母親たちへの医療知識の普及や指導は、僻地の山村においても長い目で見れば着実に進んできている。



ドムカル上村の伝統医（アムチ）の老人兄弟。ただし出産や妊婦の世話は一般に行わない。生と死の節目では、父系親族集団（パスブン）だけが協力してそれを迎え、他家の人は関わらないのが慣習のようだ。（昨冬の写真）